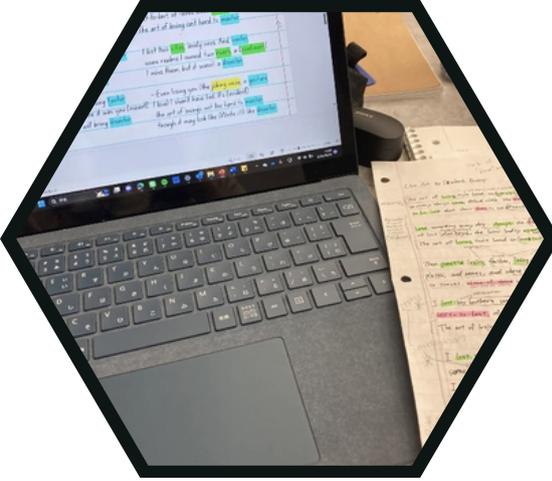




留学報告書

2023.8.15-

2024.5.22



<学業について>

今振り返ってみても、留学して初めての秋学期の授業は本当に辛くて大変だった。アメリカ入国前に決めていた履修をほとんど変更した。授業が始まってから最初の1週間は、私自身の無力さに落胆し部屋にこもりがちなることも多かった。課題1つを終えるにしても、かなり時間がかかってしまうので時間には余裕を持って取り組んでいた。秋学期は特に、LANGUAGE LABのチューターの先生にお世話になって、私1人ではやり遂げるのが大変な課題を毎週一緒に取り組んでもらっていた。先生の支えがなかったら、このアメリカではじめてのセメスターを乗り越えられていなかったと思うので、本当に感謝している。

FINAL WEEKでは、セメスター中に患ってしまったインフルエンザと

コロナウイルスによる欠席分の課題もこなしながらテスト勉強をしていたので、特に苦しかったが、無事乗り越えることができてよかった。

春学期は、秋学期がとても苦しかったのが印象に残っていたので、同じように苦しい思いをするのではないだろうかとも最初はとても不安だった。履修は何個か変更したものの、結果的に自分の興味のある授業を素敵な教授の指導の下受けることができたと思う。中でも、薬物乱用についての授業では、毎授業前に教科書を1チャプター読み終えたうえで50~100問程度のクイズを解かなければならず、薬物や医療に関する専門用語も多いため、教科書の内容を理解するだけでもものすごく時間がかかってしまって、ストレスを感じることも多かった。教授に相談したりして、教科書の本文読み上げ機能を使いながらゆっくり時間をかけて教科書の内容を理解するように努めた。留学した1つの目的として、映画に関する知識を深めるということも挙げていたのだが、映画の授業は秋学期で取り終えてしまった。何か行動を起こしたいと思い、秋学期お世話になった教授に連絡をし、週に1度のミーティングで映画にまつわるいろんなことを教えてもらうことになった。全体を通して、春学期では秋学期での様々な学びをもとに、より自分に合った方法で学業へ取り組めたと思う。

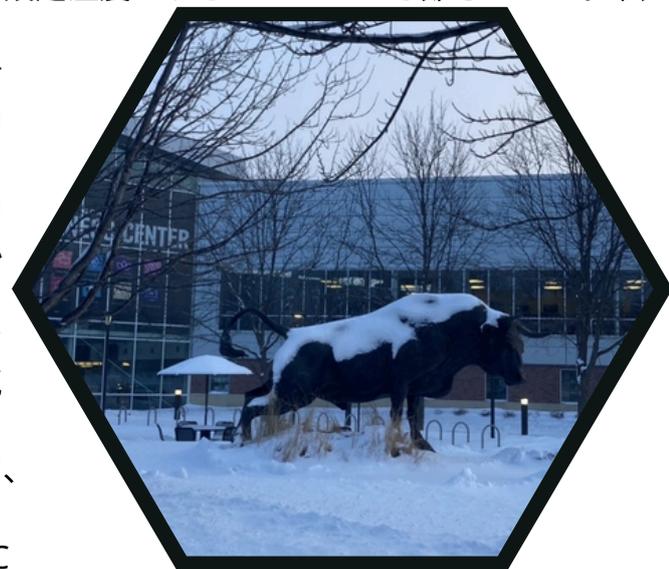
<オマハでの生活について>

寮は各々1人部屋があって、シャワー・トイレは部屋の隣合うルームメイトと2人で共有、キッチン・リビングは4人で共有するというスタイルだった。ルームメイトの1人は日本人で、あと2人がアメリカ人だったが、その2人は寮で生活を始める前から知り合いだったようでとても仲が良く、最後まで2人と仲を深めることはできなかった。今まで育ってきた環境や文化の違いから、意見が衝突することがとても多かった。特に悩んだのは、私たち4人の部屋の温度を一齐に管理してくれているエアコンの設定温度。私たち日本人2人が寒いと感じる温度は、アメリカ人のルームメイト2人にとってはほぼ下着状態で窓も開けて扇風機をかけても暑いと感じるほどの温度だったようで、全員が納得する設定温度にすることがとても難しかった。私たちも個人部屋にいるときはブランケットをたくさん羽織ったり、エアコンの風が出てくる場所を塞ぐようにするなどして対策をした。最初は日本人ならではの遠慮が出てしまっていたのか、何か不満や言いたいことがあっても、言わずにひっそりしていたのだが、何事においても言わなければ相手に伝わらないと気づき、言いたいことはきちんと伝えることで、お互いに心地よく生活することができたかなと思う。

また、寮で生活をしているうちに、シャワーの水が出にくくなってしまったり、食洗器の下に水が溜まってしまったり、電気スイッチのカバーが割れてしまったりといろいろなことがあった。しかし、修理の方に連絡をするとすぐに駆け付けてくれて、あっという間に直してくれたのでとてもありがたかった。

夏は日差しがとっても強く暑く、一方で冬は大雪が降り-30℃

まで下がることもあるオマハ。特にかなり冷え込む日は1歩外に出るだけで鼻の中が凍ってしまうのが驚いた。-20℃~-30℃近く冷え込む日が続くと、寮から出ることも危ないほどだった。時には大きな竜巻にみまわれて、大学内のシェルターに避難したこともあった。1年を通して本当にいろいろなことがあったけれど、その時の状況に応じてどうすることが最適なのかを考えながら行動することができたのでよかった。





<学業以外の活動について>

この9か月間を通して、留学生向けの友達を作るGLOBAL FRIENDSと、日本の良さを発信するFRIENDS OF JAPANというサークルに入った。GLOBAL FRIENDSでは、毎週金曜日にある人のお家にみんなで訪れて、様々な国や文化のごはんを一緒に食べて、ゲームをして、歌を歌って、用意されたトピックについてディスカッションをするというのが主な活動内容だった。参加するたびに、以前会った顔なじみの人と会うだけではなく、新たな出会いもあつたりして毎回とても新鮮な気持ちだった。実際このGLOBAL FRIENDSを通じて仲良くなれた友達もいて、積極的に参加しておいてよかったなと思った。季節に応じて様々なイベントもあった。例えば、私がアメリカに到着してすぐの

GLOBAL FRIENDSでは、UNOの近くの公園でピクニックをして、ピクニックに参加した人の中から何人かに景品が当たる抽選会が行われていた。ハロウィンの時期には、少しオマハから離れた牧場に行って、動物を見たり、パンプキンカービングをしてどのグループが一番上手かを決めるコンテストが行われたり、キャンプファイヤーをしたりした。サンクスギビングの日には、アメリカンファミリーと一緒にディナーを食べる機会を設けてくれたり、クリスマスの日にはクリスマスパーティーが開かれたりして、普段の活動に加えて様々なイベントに合わせた活動もあったので、GLOBAL FRIENDSに参加したおかげでかなり充実した9か月間を過ごすことができたと思う。

一方で、FRIENDS OF JAPANでは日本の良さを発信するという事で、オマハのダウンタウンで行われていたCULTURAL FESTIVALに参加し、来てくれたお客さんの名前を習字で書いたブックマーカーをプレゼントしたり、折り紙の折り方を教えたりした。また、アメリカに来て、人生ではじめてソーラン節の踊り方を勉強した。FRIENDS OF JAPANに所属していた他の日本人生徒は、小学生のうちに習ったという子がほとんどで、踊り方を知らなかったのは私くらいだったのでとても驚いた。初めのうちは筋肉痛に苦しむことが多かったけれど、大勢の人前で披露すると毎回ものすごい歓声で喜んでくれたのがとても嬉しかった。FRIENDS OF JAPANとして参加した最後のイベントは、小学校でのCULTURAL FESTIVALにて日本のブースを設けて、そこで名前を習字で書いたブックマークをプレゼントし、また折り紙の折り方を教え、完成品をプレゼントするというものだった。私は小さいころに習字を習っていたので、名前を習字で書く担当だった。習字でささっと名前を書いて渡すと、小学生のお子さんだけでなく親御さんも一緒にものすごく喜んでくれて嬉しかった。こうして現地の人々と日本の文化を通じて交流することで、今まであまり気づけていなかった日本の良さに気づくことができ、日本人であることにとても誇りを持てたような気がした。

<まとめ>

この9か月間は、長かったようで短かった。特に最初の4か月は、慣れない環境の中で様々な困難が立ち向かってきていたので、苦しい思いをしていた分時間が過ぎるのも少し長く感じた。友達がなかなかできなかったり、英語でのコミュニケーションに苦労したり、寮生活で身の回りのことは何もかも自分一人でやらなければならないなかったり、授業についていくことや課題をこなすことに必死になって休みが全く取れなかったり、たくさん大変なことがあった。しかし、そんなたくさんの困難をこうして今乗り越えた私だからこそ、これからどんな障壁があってもこの留学生生活を思い出せば乗り越えていけるだろうなという自信につながった。また、この9か月間の留学は自分自身と向き合ういいきっかけになったなと強く思う。日本にいた時は、学業以外の自由時間のほとんどをバイトに費やしていたために、なかなか自分と向き合う時間がなかった。だが、こうして異国の地で1人で生活してみて、自分はということが得意で、反対にどういうことが苦手なのか、自分はどういう性格でどんな状況においてどうなりやすいのかが身に沁みてわかったような気がしている。他にも、自分以外の家族、友人などの周りの人々の支えがどれだけ私にとって大切で欠かせないものだったのかということも再認識した。言うまでもなく、今回の留学は、アメリカに入国するまでの様々な手続きをサポートしてくれた方々、留学してから私の辛い話を聞いて励ましてくれた友人や家族、病気になった時に力を貸してくれた保険会社の方など、様々な人の支えがあってこそ叶えることができたなと強く思った。今後はこの留学経験をどこかで生かし、さらに人間として成長していけたらいいなと思う。

